「大阪市立大学140年の歴史」と本学での過ごし方、学び方

商学部・経営学研究科　中瀬　哲史

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本誌を受け取られた新入生の皆さんが受験勉強時に夢見た大学生活を迎えられているか、はなはだ不安です。本記事執筆時、今だ新型コロナウイルスの感染が拡大しているからです。それでも、私たちは新入生の皆さんのご入学を心からお待ちしていましたし、皆さんが元気で、楽しく学ぶことのできる大学生活を送っていただくよう、精一杯に努めたいと考えています。

さて、大阪市立大学は昨年創立140年を迎えました。たまたま私は『大阪市立大学の歴史』140周年記念誌、文系4学部の同窓会・有恒会の『有恒会130年史』の執筆という機会を得ましたので、この大阪市立大学140年、特に新制大学大阪市立大学のドラマチックな歴史についてお話しします。そして、実は私は本学商学部出身（1987年卒業）という皆さんの先輩になりますので本学の過ごし方、学び方についてもお伝えします。

大阪市立大学をめぐるドラマ

本学は、大阪市の財政難の中で設立され、常に大阪市に支援されてきました。というのは、本学設立は、第二次世界大戦時の焦土から、大阪市が生まれ変

Un roseau（アン ロゾ）

総合教育科目ガイドブック

No.22

タイトル“Un roseau（アン ロゾ）”
―― 一本の葦 ―― について

B.Pascal（1623－1662）は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
（ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリュ・フェーブル・ドゥ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン）

―― 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。――

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える（思考する、思想する）という行為によって有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、
その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだと。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

「答えがある問題」から「答えがわからない問題」へ

理学部・理学研究科　坪田　誠

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。このコロナ禍の大変な状況の中、大阪市大に入学された皆さんを心から歓迎いたします。皆さんは長かった受験勉強を経て、入学試験に合格されました。これから始まる大学生活に、大きな希望・期待を持っておられるでしょう。大学に入学したからこれで遊べると思っておられるとしたら、残念ながら（？）その期待は大きく裏切られることになります。高校までの勉強と、これから始まる大学の勉強は非常に異なります。このことを最初に認識しておかないと、有意義で充実した大学生活を送ることはできません。このメッセージではそのことを述べたいと思います。

私は、理学部物理学科の教員で、低温物理学を研究する理論物理学者です。私のこのメッセージは、理学および物理から具体例を示しながらお話しします。文系および他の分野にはそぐわない部分があるかも知れませんが、ご容赦ください。

わる象徴でもあったからです。第二次世界大戦後、実は理系中心の大阪帝国大学から合同呼びかけを受けるも拒否をし、大阪市挙げての最初の一大プロジェクトによって生まれたのです。本学設立時の大阪市長近藤博夫は「大阪市立大学は大阪カラーの豊かな大学にしたい。同時に大阪市は大学カラーの豊かな、知的な文化都市としたい」と語っていました。ただし、大阪市立大学は設立時に米軍による学舎接収により大阪市内各所に分散しており、当初から全学挙げて杉本町学舎返還運動に取り組むという苦難を味わいます。

それでも、大阪市立大学発足後、大阪商科大学の流れをくむ文系学部では、第二次世界大戦前に培われた自由な学風は復活し、新たに設置された理系学部では当時の優秀な若手研究者を招へいするなど注目されました（ノーベル物理学賞南部陽一郎氏は理工学部に所属し、ノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥氏は医学部に、一時期所属しました）。

大阪商科大学卒業生からは同窓会、後援会を通じて物心両面の支援を受け、ようやく落ち着いてきたかと思われたときに、大学紛争という時期に接し、本学は大いに動揺し、その後も学生寮問題として火種は残り、当時の社会に対して大変な影響を与えました。設置者大阪市とは「冷え込んだ」関係に陥り、学内でも教員に対する職員の不信感は高まりました。

そこで、1980年代半ばに、当時の学長を中心とした教職員は一丸となって大学正常化へと取り組み、学生寮を廃寮とするなど問題を解決しました。大学正常化に努めた時期に本学は創立百周年を迎え、その記念事業を通じて原点（関一市長の「国立大学のコッピーであってはならない」）を想い返して「大阪市立大学基本計画」を策定し、大阪市に対して「パーク・ユニバーシティ構想」（学術情報総合センター設置、キャンパス整備、JR杉本町駅の整備等）を提案しました。大阪市は本学の大学正常化の達成を評価し、ちょうどバブル経済を迎えて財政的にも豊かだったことから、大阪市の一大プロジェクトとして学内整備が行われて、現在の姿となりました。

1995年1月17日午前5時46分に起こった阪神淡路大震災に対しては、本学挙げてできるかぎりの対応を行いました。被災患者の受入、ボランティア活動の実施、被災受験生への図書館閲覧室の提供、特例入試の実施と学生の受け入れ（国公立大学受入学生の25％に当たるものでした）等を行いました。

2000年代になると、大学法人化した国立大学、ユニークな大学づくりを行う私立大学の狭間で埋もれることを避けようと現在の公立大学法人となります。その直後、不祥事から立ち直ろうとする大阪市市政改革、大阪府市の政変の影響を受けて、本学はまたしても大変な時期を迎えました。大学運営にとっては重要な運営費交付金の減額、専任教員数の削減という事態となるも、現在の戦略性ある仕組みづくりを進めました。大阪市立大学憲章を設定し、学長のリーダーシップのもとでの戦略的な大学運営を実現するガバナンス改革を進め、教育プログラムを整備し（特に英語教育において、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages；ヨーロッパ言語共通参照枠）基準のもと「読む・聴く・話す・書く」のバランスのとれたカリキュラムを作りました）、大阪の発展を牽引するため国際的視点を踏まえた地域課題解決型の公立大学へと進化することを目指しました。それだけではなく「ひとりで悩む学生へのサポートを充実する」ための「学生なんでも相談室」の設置、男女共同参画社会実現に向けた試み（現在のSDGsへの取り組み）が行われたのです。

□「答えがある問題」から「答えがわからない問題」へ

高校時代までの勉強を振り返ってみてください。皆さんがされてきた勉強は、授業を聞き、教科書や参考書を読み、知識を得た上で、問題集に取り組むことでした。つまり、「問題を解く能力」が学力であり、その学力を高めることが勉強の大きな目的でした。高校以前の勉強が、大学入試合格を最大の目標とする以上、それは自然なことです。しかし、問題集に載っている問題、入試問題は、それがどんな難問であっても、それを作った人が存在し、その人は答えを知っているのです。ところが、大学の勉強は違います。もちろん、大学でも授業を聴き教科書を読み知識を身につけますが、それにより「答えがある問題」を解けるようになることが目標ではありません。大学の勉強は、誰も答えを知らない問題、先生も答えを知らないし、本やネットにも答えが載っていない問題に取り組むのです。

理学から例をあげましょう。私たちの宇宙は、138億年前にビッグバンという“大爆発”により誕生しました。そしてその後も現在に至るまで宇宙は膨張を続けています。このことは仮説やモデルではなく、完全な事実であることがわかっています。しかし、なぜビッグバンが起こったのか、その前は何があったのか、膨張を続ける宇宙の終焉はどうなるのかは不明です。誰も答えを知りませんし、本やネットにも正解は出ていません。また、私たちの地球は46億年前に誕生しました。36億年前に原始生命が誕生し、私たち人類を含めて、いま地球に溢れている生物は、その子孫です。しかし、命を持たない物質（有機物）がどのような過程を経て生命体に転化したのかは大きな謎です。

理学から例を挙げましたが、他の分野でも同様です。大学では、このように、誰も「答えがわからない問題」に取り組むのです。

□自分がわかっているだけではダメ、人に説明できなければならない

大学入試まで、皆さんは自分が物事をよく理解し知っているということを、筆記試験で表現してきました。筆記試験で高得点をとる人が、勉強ができる人でした。しかし、大学そして大学院に進むと、筆記試験で自分の実力を示す機会は少なくなり（もちろん、学部の多くの科目の定期試験は筆記で行われますが）、口頭発表または論文発表の比重が大きくなります。自分がいくら物事をよく理解し知っていると言っても、それを表現できなければ、誰もわかってくれません（極論すれば、「知っていても表現できない」は「知らない」と同じです）。実際、私たち研究者は、筆記試験で実力を測られることは無く、オリジナルな研究成果を論文または口頭発表することで評価されます。

これから皆さんは様々な「発表」の機会に遭遇するでしょう。口頭発表では、卒業研究発表に始まり、修士論文発表会、

大阪市は周辺地域より、人、モノ、カネ、情報が集まり、活動する「母都市機能」を有し（御堂筋沿いには中枢管理機能が集まっています）、サービス業が発展するうえ、現在でも製造業も盛んという（大阪府内生産の3割を占めています）、バランスがとれています。大阪府に目を転じると少ないとはいえ農業は存在しています（大阪府能勢町には米作りからお酒を造るという「農醸一貫」を掲げる秋鹿酒造があります）。こうした大阪のあり方を支えることが求められるのです。

大学での過ごし方、学び方について

もちろん大学ですから勉学は重要なのですが、私は何よりも大学生活を一緒に過ごす「連れ」＝友人を見つけることが重要だと考えます。そのためにはぜひクラブ、サークルに入部してください。私は体育会漕艇部で4年間過ごし、そのこともあって現在漕艇部、そしてアイスホッケー部の顧問を務めています。試合でみせる現役部員のきらきらした眼にはいつも感動させられています。新型コロナウイルスの感染拡大のため、クラブ、サークルの新入生勧誘イベントには参加しづらいかもしれませんが、本学ホームページのクラブ、サークルの紹介をチェックして情報をつかんでください。他学部にも友人ができます！

同じ学部の友人を作るには、対面形式の少人数クラスの授業を受講することもお勧めします。受講生との距離、教員との距離が一般講義とは比較にならないくらい「近い」からです。

ようやく勉学についてです。まずは語学の勉強にぜひ取り組んでください。時間のある学生時代に取り組み、機会があれば留学（現在はリモート留学もあります）を経験し、日本とは異なった文化を有する国、地域を知って、世界の広さを感じましょう。

私は、大学の授業とは有用な情報をコンパクトに効率的に獲得しうるものであり、そうした情報をもとに他の学生と議論し共有するものと考えています。ただ情報を獲得するだけならば、授業を受けずとも自らで本を読めばいいのです。そこで、皆さんには、先生方がどのような視点で事物を捉えているのか、どのような観点に立って自らのストーリーを組み立てて語っているのかを注意深く見ていただきたいと思います。というのは、先生方は研究者として研究活動につとめており、そこで培った能力を最大限に活用しながら、授業の準備をしてくるからです。

本学卒業生に対する社会（企業）は「素直で真っ直ぐ、周りに変に馴染まない、骨がある」と高く評価をしてくれています。そのため、結構、社会的に認められた企業に就職し、そこそこの鍵を握る重要ポストに配置されます。同窓会（有恒会）に聞くと、「自立した個」の同窓生が「ゆるく」つながる場だそうです。つまり、大阪市立大学とは、在学中から、一定の距離を保ちつつ「素の自分」で付き合える場であると言えます。

最後に、改めて新入生の皆さんを心よりお迎えします。同じ大阪市立大学の構成員として、一緒にこの大阪市立大学を楽しく、おもしろい大学へと盛り上げていきましょう！これからどうぞよろしくお願いします。

中瀬　哲史（なかせ あきふみ）
1963年生まれ
1995年　大阪市立大学大学院経営学研究科後期博士課程修了　博士（商学）
現在、経営学研究科　教授
専攻分野／経営史・公益事業論
全学共通教育でのご担当科目（以前担当した科目を含む）／「現代の経営」「日本の企業」

博士論文公聴会、学会発表、国際会議発表など、論文発表では、卒業論文から修士論文、博士論文、学会の学術雑誌、国際学術雑誌への論文発表などを経験されるかもしれません。いずれにしろ、自分の考えをわかり易く人に説明し説得することが要求されます。またその過程で人の主張も理解できなければなりません。その意味で、コミュニケーション力は、これから先の勉強を進めその成果を発信する上で決定的に重要です。ここでいうコミュニケーション力とは、単に目の前にいる人と会話をする能力ではなく、自分の考えを口頭または文章で表現する能力、そして他人のそれらを理解する能力です。こうした能力が、社会に出てからも不可欠であることは論を待ちません。このようなコミュニケーション力を高めることも、大学での勉強において非常に重要です。

□皆さんに期待すること

残念ながら、私たちの未来は単純に明るいとは言えません。今回の世界的な新型コロナウイルスの感染拡大のみならず、東日本大震災に代表される巨大地震、地球温暖化とそれに起因する巨大台風・集中豪雨、格差が進む社会構造、絶えない国際紛争と国際摩擦など、人類の英知を結集しなければ解決できない問題が山積しています。これらは、言うまでもなく「答えがわからない問題」であり、私たちの存亡に関わる重要課題です。大学生となった皆さんは、こうした問題に取り組むためのスタートラインに立ったと言えるでしょう。皆さんの世代がこれらの問題の解決に参加し貢献してくださることが、「持続可能な社会」にとって不可欠です。

□それでも大学生活と勉強は楽しい

少し悲観的なことも述べましたが、それでも大学生活は、楽しく充実したものにすることができます。ただし、誰にとっても、無条件に、楽しく充実したものになるとは限りません。大学生は、高校生以下に比べて、個人の自由度が大きく、充実するもしないも個人の意識と行動に依るところが大きいのです。ここに述べたようなことを意識して、まず目の前の課題に真摯に誠実に取り組んでください。高い意識を持って、勉強や課外活動に取り組み、友人と交流すれば、楽しく充実した学生生活を送ることができます。皆さんが充実した学生生活を送られ、大阪市大に来て良かった、成長したと思って卒業されることを願ってやみません。

坪田　誠（つぼた まこと）
1960年生まれ
1987年京都大学大学院理学研究科博士課程修了　理学博士
現在、理学研究科　研究科長・教授
専攻分野／低温物理学・物性理論
全学共通教育での担当科目（以前担当した科目を含む）／現代科学と人間、基礎物理学2